

九州大学芸術工学部未来構想デザインコース

学校推薦型入試 小論文試験 例示

問題1 文章を読み、以下の設問に答えなさい。

- (1) 文末下線部、「自前の生活の喪失」とはどのようなことか、文章中に挙げられているのとは異なる事例を一つ挙げ、400字程度で説明しなさい。
- (2) (1)で記述した事例に対し、「自前の生活」を仕事場や家庭において回復するにはどうすればよいと考えるか、回復の過程で生じるさまざまな障害を予想しながら、600字程度で具体的に論じなさい。

生産と消費、労働する時間と日常生活の時間がはっきりと区分された現代人の生活をよく見ると、そのある部分は伝統的な固い社会の生活とむしろ似ていることに気づく。

固い社会において生産的活動とは自然の大きな力にしたがうことだったと私は書いた。現代の多くの人間も、労働とはある大きな力にしたがうことであり、その力の指示する秩序によって行動することであると感じている。ヘシオドス¹の農夫たちは、季節の進行にそって、自然の記号の指示を神の指示と重ねながら、その指示する順序のとおり農作業を実行した。現代の工場の労働者はそれぞれの持場の工程で、工程の進行にそって、作業標準や技術的インストラクションの指示する順序のとおり作業する。ここでも労働はしたがうものなのである。ただしたがう対象は、かつての神ではなくテクノロジーである。ここに現代の社会におけるテクノロジーの重要な位置づけがある。

現代の労働は好むと好まざると組織の中の労働である。生産と販売の組織（企業）、社会の構成している諸制度の基本単位である組織（学校、病院、役所、銀行等々）、平均的な人

¹ ヘシオドス 紀元前8世紀から7世紀にかけて実在したと予想される古代ギリシャの詩人。『神統記』や『仕事と日』といった作品の作者とされている。

間はそれらの組織の一つの中で、彼のめざめている時間のほぼ半分を過ごすのである。これらの組織の中の労働を編成する原理は、工場の工程を編成する原理と同一であることは、私が『工場の哲学』（平凡社）で明らかにした点である。組織（職場）の労働の中で、人びとは不断にテクノロジーの指示する秩序にしたがうことを、日常的に強いられつつ生きるのである。

ここから現代に特徴的な態度の分岐が生じる。ヘシオドスの農夫にとって、自然の秩序にしたがうことは神の摂理にしたがうことであった。だがテクノロジーは超越的な神の産物ではない、人間の産物である。人間の目的意識性の追求の外化され対象化されたものである。だから、現代人は自己を「自由な個人」「目的意識的に自由に行動を選ぶ人間」と自覚する程度に応じて、テクノロジーの指示する秩序と自己の意志の間のズレ、あるいは擬人化された組織や制度の全体的挙動と自己の意志の間のズレを、自己自身の分裂、あるいはあるべき人間からのズレとして、うけとめざるをえないのである。ここから現代人の固有の意識というべき疎外の意識があらわれてくる。疎外の克服が、人間の自由の課題となってくるのである。

しかしこの態度は分岐の一つの側である。他の側には、したがうことに積極的に自らを適応させて行く選択肢が存在しうる。ただ人間にとってしたがうという行為は意味づけがあってはじめて安定する。固い社会での自然への服従は、より超越的な神の摂理への服従の中に意味づけられていた。現代の社会のテクノロジーの指示への服従は、神の摂理に代る合理性への服従によって説明され意味づけられる。特定の目的実現に収斂して行くテクノロジーよりも、より普遍的な性格をもつ科学が、合理性の象徴として神の摂理に代る位置を占める。合理的であること、科学的であることが、人びとが組織の論理、テクノロジーの論理に積極的に自らをしたがわせようとする態度を意味づけている。その時科学は、ちょうどヘシオドスの農夫にとっての神の位置に立つことになる。果して科学はそのような立場に立ってよいのであろうか、科学は人間の全生活の規範となるにはあまりにも部分的な認識の体系なのではないか、という疑問がおそらくこの十数年来反科学論の名で問われてきた疑問の核心にある。

私たちのめざめている時間のほぼ半分を占める労働の中で、恐らく大多数の人びとはこの両極をなす態度の間をさまよいながら生きている。どのように疎外の感覚にこだわる人でも、その労働の過程では大部分「したがう」生活を生きている。そしてその服従の根拠を合理性あるいは合目的性への服従に求めている。またどのように「したがう」行動にならされている人でも、折にふれ組織の行動と自らの意志のズレになやみ、合理的なものにしたがうだけで人間として十分であるかと考えたりする。そういう形でこの両極は人間の問題の出発点となるのである。では、めざめている時間のもう半分を占める、職場（組織）の外の生活においてはどうか。

生産と消費という区分に立って、ここまで論じてきた時間が生産の側に立つならば、ここから論じる時間は当然消費の側を代表することになる。だが消費を商品の購入ととらえる立場からすると、私たちの労働時間外の生活が、全面的に商品の購入に依存するようになったのはごく最近にすぎないことを強調しておかねばならない。ほんの五、六十年前まで私たちはせいぜい食料と衣類と、ごくわずかな手工業品を商品として購入し、残りの日常生活の必要は家庭内の自己労働でまかなう生活にならされて来た。ミシンやラジオからはじまって、洗濯機、冷蔵庫、掃除機、テレビ、ステレオ、ビデオ、自動車、二輪車……無数の商品の家庭内への侵入はそれ以後のことである。そして人びとの日常感覚における技術進歩、テクノロジーの発展は、ほとんどこうした新商品群の家庭への侵入と結びついている。

だから、われわれは、人びとが商品に依存しすぎることによる家庭内での自己活動の喪失という問題を、テクノロジーと人間の問題のひとつとしてとりあげざるをえない。物的な商品に依存することになった人びとは、やがてサービスを商品として購入することになって行く。かつては家庭内の重要な自己活動の領域であった子どもの教育も、塾、家庭教師などにゆだねられ、食事は配達サービスに、家庭内のトラブルはさまざまなコンサルタントに、遂には胎児を腹の中で育てる過程まで金を払って他人のサービスを購入することになる。こうしたサービス商品依存は、日常生活における自己活動の領域を、かつてとは比較にならぬほどせばめているのだ。それは、さまざまなことを自分でやり、失敗したり成功したりしながら学び成長して行くプロセスの生活の中からの喪失を意味している。

この問題は、いわゆる情報化技術の進展とともにより重要となるであろう。情報化ということばは、脱工業化というようなことばとも結びつけて、われわれが工業化された社会固有の難問を脱却する基礎を技術的に準備するかのごとき展望でしばしば語られるが、私は信じない。情報関連技術も商品の生産と結びついて開発されている状況は変らない以上、人びとの生活の過度の商品依存から生じる問題は変らない。むしろそれが商品として大衆の日常生活の中に入りこんでくる領域は、知的・精神的活動の領域であると予想されるだけに、そこでの人びとの自己活動、自前の生活の喪失はより大きな問題を構成するにちがいない。テクノロジーと商品と人びとの日常生活との関連という問題を、正面から考えてみなければならぬ時期がやがてくるであろう。

中岡哲郎『技術と人間の哲学のために』（農山漁村文化協会、一九八七年）より